東北諸方言アスペクトの捉え方

津　田　智　史

1．はじめに

日本語諸方言のアスペクト研究はかなり進んでおり、全国的な調査も散見できる。しかし、広く体系的に捉えられる西日本諸方言に対し、東北方言のアスペクト研究は、地点を絞っての調査に限られる場合が多く、たとえば県単位など広範囲でアスペクト表現を調査したものは少ない。国立国語研究所の『方言文法全国地図』(以下、GAJ) は全国規模の調査結果を示すものであるが、これは文法全般が対象であり、アスペクト関連項目は代表的な将然、進行、結果など、アスペクト的意味のほんの一部分にすぎない。また、形式としては、GAJ第198図「散っている＜進行態＞」や第199図「散っている＜結果態＞」で東北諸方言の分布をみると、テイル形だけでなくテダ形、テラ形などいろいろな形式のヴァリエーションが用法の枠を越えてみられる。アスペクト的意味では場面の違いが明らかであるにも関わらず、両場面での形式は各地域で共通のものも確認でき、それぞれの形式の意味分けは未だはっきりとなされていない。

そこで、記述が行われ用法が明らかになっている青森県方言に焦点を当て調査を行った。本稿では、この2008年に行った青森県全域調査の結果と、先行研究にみられる東北方言におけるテンス過去での形式の使い分けから、東北諸方言に共通するアスペクトの捉え方について考察する。結論から言えば、青森県方言ではテンス現在の継続相においてテラ形とテダ形が眼前描写か伝達かで意味分けを行っており、これは東北諸方言のテンス過去にみられるタ形とタッタ形で示される、出来事と現在の関係性の差異に重なるものである。

2．先行研究

青森県のアスペクトに関する報告には、弘前方言の高田（2001)、五所川原方言の工藤（1999）などの各地域方言に特化した記述調査があり、それぞれの方言で体系だてが行われている。これはどちらも津軽方言に区分されるものである（図１[1]）。南部方言におけるアスペクトの記述は、青森県を対象にしたものはみられないが南部方言に属する岩手県遠野方言[2]については高田（2003）で報告がある。また、全国的に調査を行ったもの

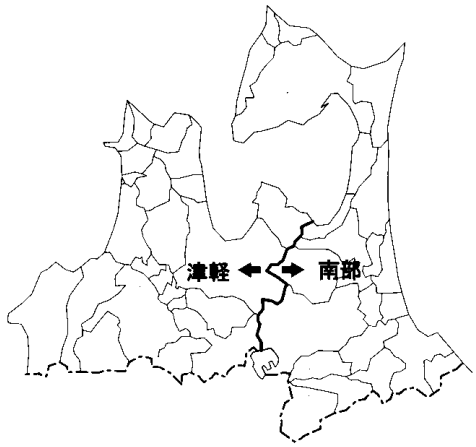

図１　青森県方言区画

として、GAJ が挙げられる。これらから、青森県の特徴的なアスペクト表現として、テンス現在においてテラ形が広く使用されていることが確認できる。以下、テラ形を中心に先行研究からみえる用法を確認する。

まず、津軽方言に属する弘前方言を対象とした高田（2001）では、運動動詞に接続した場合、テラ形が共通語テイル形と同様に＜動作継続＞と＜結果継続＞を表すとする。ただし、この形式は同一形式でテンス過去においても＜動作継続＞と＜結果継続＞を表すことができるとし、この点で共通語との違いを指摘する。また、テラ形は他にも派生的な＜動作パーフェクト＞＜痕跡＞＜習慣＞なども表わしうるとする。

工藤（1999）は五所川原方言の体系を示しているが、弘前方言のそれとほぼ重なる使用が確認できる。異なる点はテラ形がテンス未来をも表すことができること、また、高田（2001）などでテンス過去を表わす形式とされるテダ形がみられないことなどである。これらの点を除けば両方言とも似たような体系を持っており、津軽方言のアスペクト体系はほぼ均一なものと捉えられる。

次に、高田（2003）に示される南部方言の一つである岩手県遠野方言のアスペクト体系をみても、テンス現在においては使用される形式は上の高田（2001）で示される津軽方言のものと変わりないようである[3]。ただし、完成相過去の形式にはタ形とタッタ形が確認できる点で津軽方言とは異なる。

以上から、先行研究に従えば、青森県方言において、テラ形がテンス現在・過去の＜動作継続＞と＜結果継続＞、また派生的な＜動作パーフェクト＞＜痕跡＞＜習慣＞を表すことができるといって間違いなさそうである。これを津軽方言に代表させてアスペクト体系をまとめると表1のようになる。

表1　先行研究からみた津軽方言アスペクト体系

テンス＼アスペクト	完　成	継　続	パーフェクト	反復習慣
未　来	スル	シテル （シテラ）	シテル （シテラ）	スル シテル （シテラ）
現　在	—	シテル シテラ	シテル シテラ シテアッタ シタ	スル シテル シテラ
過　去	シタ	シテラ シテダ シテアッタ	シテラ シテダ シテアッタ	シタ シテラ シテダ シテアッタ

これをみると一つの枠にいくつかの形式が混在しており、そのほとんどは明確な使い分けが示されていない。形式が2つ以上あれば、その使い分けが問題となるはずであるが、その記述はほぼ見られない。佐藤（2007）で青森県津軽方言のテル形とテラ形、タッタ形（テアッタ形含む）が、それぞれ将来に起こる動作、現在続いている動作、過去に続いていた動作として、一連の時

間の流れの中でその違いが述べられているが、これだけでは表1のような体系となる各形式の意味を説明しきれていない。東北諸方言全体に目を移しても、南部方言（竹田2000、高田2003）や南東北方言（渋谷1994、竹田・吉田2000）でテル形とテダ形、タ形とタッタ形の差異に言及したものがみられるが、個別形式の相関は示されていても、各形式の表す意味やその関係についての記述はみられない。

3．調査概要

2008年9月11日～16日にかけて青森県全域19地点で調査を行った。ここでは青森県下全域を対象とし、各場面でどのような形式が使用されているか、全体を俯瞰できるよう調査を行った。調査員は、津田智史ほか東北大学大学院生2名、東北大学学部生1名の計4名である。

各地点の話者情報は以下の通りである。話者総数は21名である。話者属性と調査地点図を示す[4、5]。話者の世代に幅がみられるが、後述する調査結果では世代差より地域差という点で差が窺えることから、今回対象とした話者の世代差に関しては考慮する必要はないと判断した。

1．八戸【F54】、2．三戸【M79】、3．三沢【M73】{30(13)／岩手県九戸郡野田村}、4．十和田【M82】、5．野辺地【M87】{5}、6．横浜【M79】、7．六ヶ所【F78】、8．むつ【M90】、9．大畑【M74】、10．大間【M59】、11．弘前【F65】、12．黒石【M74】、13．大鰐【M62】{5}、14．青森市【F70】{31（13）／浪岡}、15．小湊【M77】{12}、16．狩場沢【M68】{7(7)／樺太}、17．三厩【M73】{29}、18．鰺ヶ沢【F67】、19．深浦【M71】、20．五所川原【M72】{3}、21．中泊【F77】

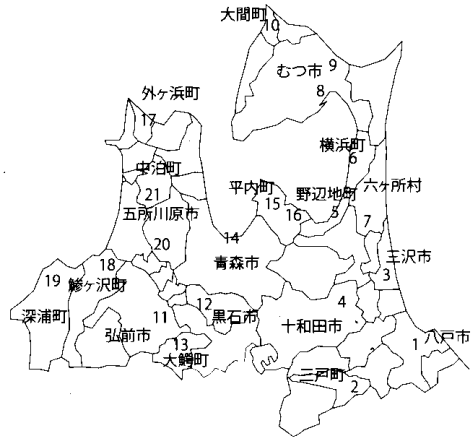

図2　調査地点図

調査では、主体動作動詞、主体動作客体変化動詞、主体変化動詞、存在動詞などいくつかの動詞に関し、各場面での使用形式を探るため、将然や動作の進行過程、結果の状態、痕跡がみられる場面、反復習慣を表す場面など、従来の先行研究でアスペクト的意味を表すとされる範囲について面接形式で調査している。その際、各場面で使用される形式を明らかにするために、テダ形、テラ形などの形式を使用するかの確認を行った。そのため、GAJに比べ話者一人当たりの回答形式が多くなっている。また、地図化する際には、使用すると認められた形式全てを併用として分布に反映させている。なお、今回はテンス現在の能動文に焦点を当て調査項目を設定した。調査項目にはGAJと同じ質問項目も含め、経年比較できるように設定した。

4．青森県方言のアスペクト表現の分布と使い分け

ここでは2008年に青森県全域で行った調査結果（以下、2008調査）をもとに、当該地域で使用されるアスペクトの形式を確認していく。調査結果は地図化して示す。また、GAJと同じ質問項目については比較を試みたい。GAJのデータは、その都度簡略図を並べて示す。凡例は、テル形、テラ形など、ある程度形式でまとめ、記号を与えている。地図上の凡例の「その他」は、基本的に質問文などで示されている動詞とは別の動詞で回答されたものを指す。

なお、言語地図の作成に当たっては、国立国語研究所ホームページ「方言研究の部屋」で公開されているプラグインソフト（lms）を使用した。

「運動会が開かれている」

最初の質問項目はGAJでも調査されている「今、運動会が開かれている。」という項目である。西日本諸方言では、「運動会がアリヨル」と答えられる場合が多いことがGAJからわかる。しかし、東日本諸方言においては「（運動会が）やっている」といったものが主流になる。GAJにおける青森県の分布は図3の通りである。

図3　開かれている（GAJ）

図4　開かれている（2008調査）

図3のGAJの分布をみると、ほぼ全域がヤッテラの回答で統一されており、2008調査の結果（図4）でもテラ形が中心であることから、青森県下ではこの状況においてテラ形の使用が顕著であることがわかる。しかし、その中に先行研究ではテンス現在の継続相では確認できないテダ形もみることができる。このテダ形は2008調査では下北半島の付け根から岩手県境と、南部方言によくみられる。GAJと2008調査を比較すると、このテダ形の使用が広がっているようにもみ

えるが、2008調査ではすべて併用回答である。またテダ形を使用する話者の数人から、テラ形を使用するのは実際に運動会が行われているのを実際に見た場合であるとの内省があり（話者ID 1、6、16、19)、あとで運動会が開かれていることを他人に伝える場合はテダ形が選択される。つまり、テラ形とテダ形は状況によって使い分けられていると考えるのが妥当のように思われる。

(1) 運動会　ヤッテラ。（眼前描写）

(2) 運動会　ヤッテダ。（伝達）

(1) のようにテラ形を使えば、発話者が目の前で運動会が開かれているのを確認していることを表わし、(2) のテダ形は専ら他人への伝達を意図する場合に使用される。このようにテダ形は、運動会が現在行われていることを表すとき、伝達という限られた場面での使用が内省されている。ただし、厳密に進行の場面を捉えているか（運動会が今も開かれていることを含意しているか)、過去に確認したこととして捉えているか（運動会が今も開かれていることを含意していないか)、テダ形の使用範囲を測るために質問設定をさらに細かくする必要があるが、ここでの調査文は「今開かれている」場面を聞いているので、前者であると捉え、論を進める。

さて、青森県方言の先行研究ではテダ形はテンス現在においてほぼ確認できない形式であったが、GAJや日高（2000）をみると、テダ形は東北地方で広く使用されていることがわかる。特に山形県や秋田県南部では進行過程の場面においても、まとまった分布が確認できる。この東北方言のテダ形とテラ形は、[d] と [r] が単純に子音交替ののち意味用法の面でも使い分けがされているとする先行研究もあり（日高2000、高田2001)、2008調査からは両形式に差異はないとする話者やテダ形自体を使用しない話者もいたが、場面を詳しくみていくと上記のような違いがみえてくる。また、この子音交替（[d]⇔[r]）は、青森県下では此島（1968）や秋田県下で日高（2000）が挙げている「ブッタダク→ブッタラク」など不規則的に変化するものとしての例しかみられない。これは、[d] と [r] のどちらの音でも構わない（弁別意識がない）という点で [d] と [r] の交替を示唆するが、2008調査の結果からは、これら [d] と [r] は、細かく場面を分けてみていくと伝達と眼前描写と使用場面の弁別に関係しそうであることがみえてきた。一般的に、子音（この場合 [d] と [r]）が自由に交替できることが意味分けにつながるというものではない。日高（2000）や高田（2001）が示すように[d]と[r]の交替という何の弁別機能もない変化が別々の意味を担うようになるのかという点でテラ形はテダ形からの変化であるとするこの出自には疑問が残る[6]。また2008調査においては、テダではなく、ごく短く「イ」の音を残したテイダ（半角のイ）というような、テイダの短縮した形式がみられた。

「(今まさに桜が）散っている」「(風が強くて桜が）散っている」

次に、主体動作動詞「散っている＜進行＞」と「散っている＜結果＞」の結果をみる。まずは、「散っている＜進行＞」について、GAJと2008調査の結果の比較をしてみたい。図5がGAJ「散っている＜進行＞」の結果、図6が2008調査の結果である。

どちらにおいてもチッテラが全域で回答されているが、チッテルやチッテダも散見される。

チッテルは先行研究でも使用が確認できる。共通語の影響なのか、図５、６では使用地域もばらばらであり詳しい使い分けなどは今回の調査からは断定ができない。チッテダ形は、共通語のテイタ形を想像するとテンス過去の形式にみえるが、東北各地方言では、GAJをはじめ、テダ形で進行を表すことができるという報告がみられる[7]。図５、６において、テダ形はテラ形と併用されている場合がほとんどであるが、具体的な使い分けは2008調査から見出すことはできなかった。ただし、ここでもID14青森市の話者からテダ形は伝達の場合に使用するという内省がえられた。なお、ここでも伝達は「(運動会が) 開かれている」と同じく、「自分が確認したこと」の伝達ということに限られる。

図５　散っている＜進行＞（GAJ）

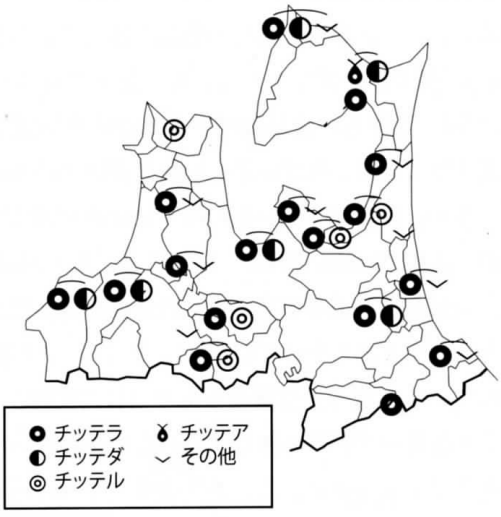

図６　散っている＜進行＞（2008調査）

次に、「散っている＜結果＞」の調査結果をみてみたい。＜進行＞の図５、６では、テラ形が目の前で桜の花が散りつつある状態を表していたのに対し、図７の花が地面に落ちてしまった結果状態を表す場合にはテラ形が使用されにくい。それは、シテマッタ（「～してしまった」の意）がこの場面での表現を担っているからである。ただし、津軽方言ではテラ形でもこの場面を言い表すことはでき、この点で共通語のテイル形と似たものといえる。また、このシテマッタにもテラやテアッタが承接可能である（図７凡例）。ここでも目の前の状態を表すテラがよく承接して

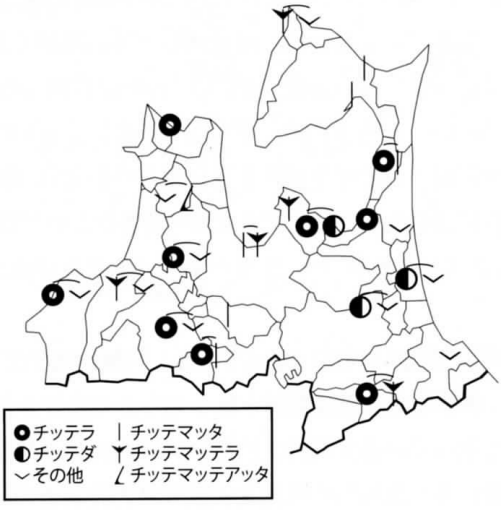

図７　散っている＜結果＞（2008調査）

いるのがわかる。GAJにも「散っている＜結果＞」が収録されているが、回答のほとんどがテマッタ形である。2008調査では、こちらも＜進行＞に比べ数は減っているが、南部方言で数地点テダ形が確認できる。ここでは伝達であるという内省は聞かれなかった。

「（金魚が）死んでいる」「（バスが向こうから）来ている」

次に主体変化動詞の「死んでいる＜結果＞」「来ている＜進行＞」をみる。前者は状態変化、後者は位置変化を表す。

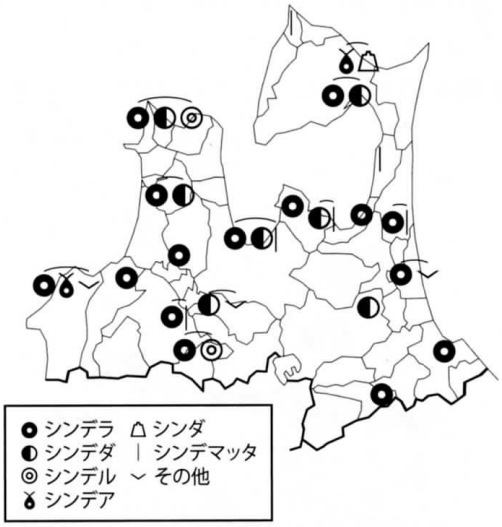

図８　死んでいる＜結果＞（2008調査）

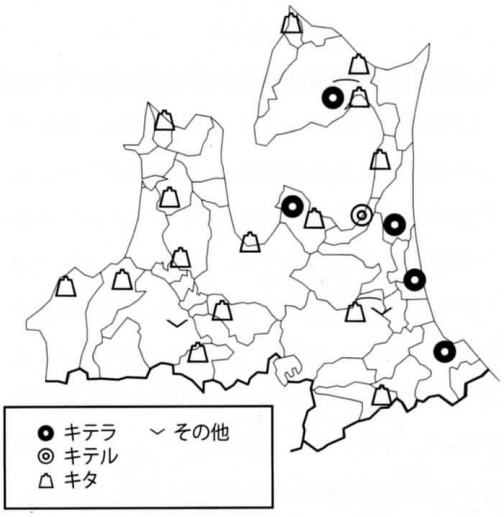

図９　来ている＜進行＞（2008調査）

まず図８は、金魚が死んでいるのを発見した時の第一声である。主体動作動詞ではこの場面において使用があまりみられなかった、テラ形（シンデラ）で結果状態を表している。テマッタ形もみられるが、テラ形の方が圧倒的に優勢である。また、テダ形も各地でみられる。テラ形とテダ形の使い分けはここからは判断できないが、次節で述べるようにこの場面でのテラ形、テダ形の併用は東北諸方言のアスペクトの捉え方により説明できるものと考える。特に津軽方言において、他の分布図に比べ図８ではかなり広範囲でテダ形が確認できる。津軽方言ではテラ形で結果継続を表すことができるが、主体動作動詞の＜結果＞ではテマッタ形が使用されやすく（図７）、主体変化動詞の＜結果＞ではテダ形も使用することができる。これは、後述の出来事と現在の関係性による。

次に図９では、バスが向こうからやってくる場合についてどのように言うのかを聞いた結果である。キタの回答が多いが、キテラも数地点みられる。高田（2001）で、主体変化動詞の場合にはテラが下接すると＜結果継続＞を表すとあるように、この質問の際には、キテラだとバスがすでに停車している状態を指すという内省が多くの話者から得られた。これは、「来る」という変化の起こったことを表しやすいということである。このため、ここではキタというタ形でバスが

やってくる様子を表している。しかし、一方で長い距離をこちらに向かってきているバスがあるとすれば、それをみてキテラということができる、という内省も得られた。こちらは、「来ていない→来た」という変化ではなく、来るという動きを目撃したままに描写したものと思われる。

図5～8から、高田（2001）が述べるように、動詞の時間的な境界（限界性）と相まって、基本的にはテラが主体動作動詞に下接すれば進行状態を表し、主体変化動詞に下接すれば結果状態を表すことがわかる。しかし、図9からわかるように、位置変化を表す主体変化動詞の場合、状況によってテラ形の使用が可能になる。おそらく、位置変化など、変化に時間的幅がある動詞ではテラ形は使用可能であろうと思われる。この捉え方は南部方言に顕著である。

「（朝窓を開けると地面が濡れている。これは雨が）降っている」

図10は、パーフェクトの下位分類、痕跡について聞いたものである。この図からわかるように、ほとんどの話者がフッタというタ形で表現している。中でも、今降っていないことから、「夕べ雨が降ったんだ」という形が多くみられた。<痕跡>では、雨が降ることがすでに終わっていることを明示する表現が使用されやすいようである。一方、この場面ではテラ形は使用されづらいようであり、フッテラという形式は下北半島の付け根から岩手との県境の南部方言に固まってみられる。県西部の津軽方言になるとフッテアッタ（タッタ形）で表現されることがあるようだが、こちらもフッタというタ形での表現が一般的なようである。

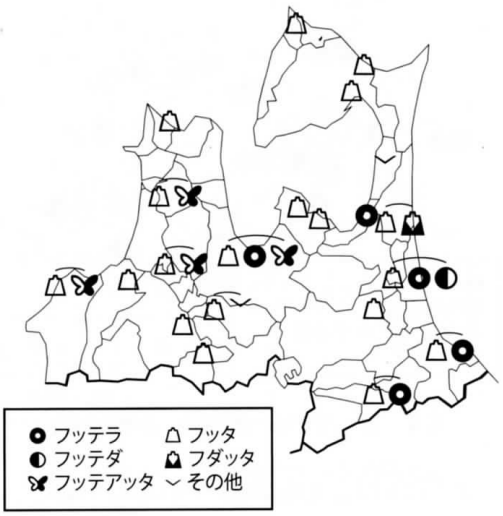

図10　降っている<痕跡>（2008調査）

先行研究では、「〔書き損じた便箋が捨ててあるのを見て〕太郎、手紙、{書イデル／書イデラ}。」（高田2001）や「〔赤い顔や空になったビンを見て〕お父さん、ビール、飲ンデラ。」（工藤1999）のような例が挙がっており、特に工藤（1999）では、「すべての運動動詞において」痕跡を表すことができるとしているが、2008調査の図10、無情物が主体である動詞「降る」ではテラ形の使用は少ない。また、2008調査では有情物主体である「食べている<痕跡>」も調査したが、こちらもテラ形が県下に6件散見されるにとどまり、基本的にはクッタの形が主流となっている。

「（毎朝納豆を）食べている」「（この店にはいつも）来ている」

習慣を表す場合について主体動作動詞「食べる」と主体変化動詞「来る」について聞いた。図11が「（毎朝納豆を）食べている」、図12が「（この店にはいつも）来ている」の結果である。

どちらの図もテル形が青森県全域に広がっているのがわかる。ただ、津軽方言ではテラ形の使用も確認できる。動詞間の差もそれほどないようにみえるが、位置変化を表す主体変化動詞の「来ている」ではクルというル形でも習慣を言い表すことができるが、主体動作動詞の「食べている」ではアスペクト形式をよく下接して言い表す傾向が強いようである。また、渋谷（1994）では、山形県鶴岡方言の記述で、恒常性が高いほどテル形が方言形（鶴岡方言ではテダ形）よりも使用されやすいとあり、図11、12も「毎朝、いつも」といった長い期間での習慣の場合であるのでテル形の回答が多くなっている。東北諸方言におけるテル形は恒常性によって方言形と使い分けられていると思われる。

また、図９「来ている＜進行＞」では南部方言においてテラ形がよく観察されたが、この図12ではむしろ津軽方言にテラ形が偏っている。これは、津軽方言と南部方言でテラ形の表せる範囲が異なることを窺わせる。

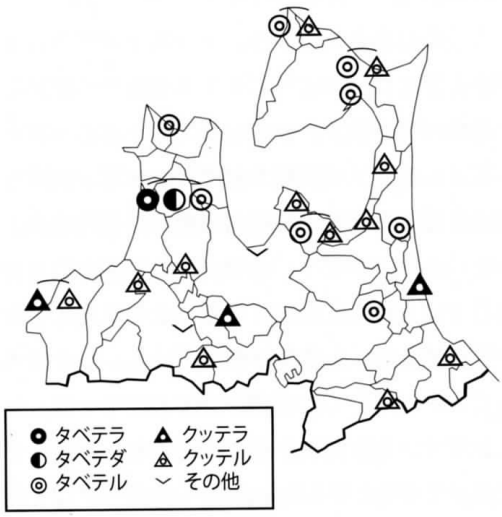

図11　食べている＜習慣＞（2008調査）

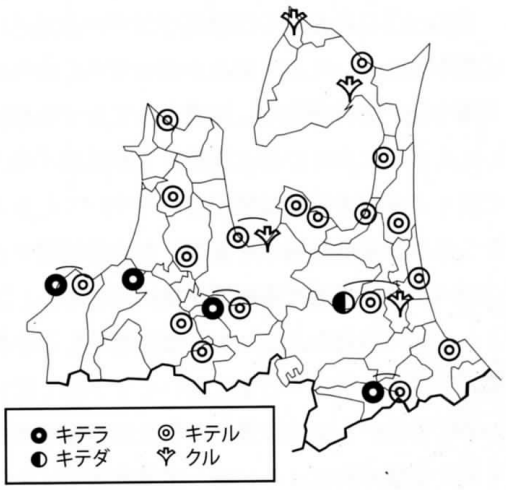

図12　来ている＜習慣＞（2008調査）

用法の総括

以上2008調査の結果をみてみると、津軽・南部両方言において、テラ形はテンス現在では共通語のテイル形と同様の場面で使用されていることがわかる。しかし、伝達形式テダ形との併用により、より目の前の出来事であることが明示されているという点で異なる。これは特に南部方言で顕著である。また、高田（2001）や佐藤（2007）にもあるように、津軽方言ではテル形が未来を表わすものの、テラ形は未来を表しえないという点で、テル形とテラ形の差異を示すものである。

以上の2008調査の結果を示した分布図から、青森県のテンス現在のアスペクト表現についていくつか特徴を示すと以下のようになる。

① 青森県下ではテラ形の使用が顕著である。

② テラ形は動詞によってアスペクト的意味を変える。主体動作動詞だと動作の継続を表わしやすく、主体変化動詞だと結果継続を表わしやすい。共通語のテイル形に用法が似ている。

③ 基本的に継続相ではテラ形が目の前の状態を示し、テダ形は伝達時に使用可能である。テル形は習慣でよく用いられる。

④ 先行研究では津軽方言と南部方言に差異はみられないが、2008調査ではテンス現在におけるテダ形の使用が南部方言に多くみられる点など、同じ形式を使用していても表す範囲が異なる可能性が窺える。

この内、③にある目の前の出来事を表すテラ形は形容詞にも適用される。工藤・八亀（2008）で述べられているように、「花子、きれいデラ。」は一時的な状態（本発表で言う眼前描写）となり、「今日はきれいだ」というような厭味な意味合いで受け取られてしまう。花子の恒常的な性質を述べるには、「花子、きれいだ」としなければならない。

また、④にあるように使用されている形式に大きな差異はみられないが、テラ形は津軽方言と南部方言において表す範囲が異なりそうである。南部方言では③のようにテンス現在でテダ形と明確な使い分けがあり、津軽方言でもテラ形は目の前の状態を表すというのは同じであろう。ただし、図9「来ている＜進行＞」や図10「降っている＜痕跡＞」で津軽方言ではテラ形が使用されにくく南部方言では使用されやすいことから、津軽方言ではテラ形は動詞の動作や変化自体、もしくは直接的な結果を目撃しないと使用できないといえる。つまり、津軽方言の方が南部方言に比べテラ形で表せる範囲が狭いのである。津軽方言では主体変化動詞「来る」などは変化が起こった後（変化したことを目撃した時）しか表すことができず、主体動作動詞「降る」などは実際に「降る」行為を目撃しないとテラ形では言い表せない（同じく主体動作動詞の図7「散っている＜結果＞」では、落ちた花を実際に確認することで「散る」行為が起こったことを把握しテラ形が使用可能になる）が、南部方言では主体変化動詞で変化に時間的幅があり動作の部分を把握できる場合や、主体動作動詞で実際に行為を目撃していなくてもそこに残っている行為を想起させるものがある場合、それらを目撃すればテラ形が使用可能である。テラ形の表す範囲の狭い津軽方言では、テラ形が担えない範囲を他の形式によって言い表す傾向があることが窺える。

2008調査から、継続相では場面によるテラ形、テダ形などの使い分けがはっきりしてきたが、まだまだパーフェクトや反復習慣での形式の使い分けは考察の余地が残る。2008調査では明確な差異は現れなったが、先行研究に指摘されている記述に従えばこれらの細かな使い分けがみえてくる。

5．東北方言のアスペクトの捉え方

以上、2008調査の結果から青森県のアスペクト表現についてみてきた。2008調査ではテンス現在を対象としたため、形式がある程度限られその他の形式を得ることができなかったが、先行研

究をみると、テンス過去における形式の使い分けについて言及されているものが散見できる。ここでは、南部方言である岩手県遠野方言について記述した高田（2003）、岩手県盛岡市方言について記述した竹田（2000）で述べられるタ形とタッタ形の使用される場面の違いと、2008調査でみえてきた青森県全域でみられる継続相におけるテラ形とテダ形の使用の差から、東北方言のアスペクトの捉え方について考察したい。

まず、竹田（2000）、高田（2003）などで述べられるタ形とタッタ形の使用される場面の違いについてみてみる。岩手県盛岡市方言のタッタの意味記述を行った竹田（2000）は、「盛岡市方言のタッタ形は、その形式自身が出来事と現在とを切り離すという役割を担いうる点でより断絶的であり、タ形との違いはこの点にある」と述べており、以下の例のように、タッタ形とタ形で意味が変わってくるとする。

(3) 隣から　きれいな水蜜　モラッタッタ。　（水蜜はもうない）

(4) 隣から　きれいな水蜜　モラッタ。　（水蜜がまだ残っている可能性が残る）

（竹田2000より引用。用例番号は筆者改変。）

このように、タッタ形を用いることにより、水蜜が残っていないこと、つまり、出来事と現在が切り離されていることを明示する。これを竹田（2000）では「出来事と発話時現在との断絶性」と呼ぶ。現在と出来事の関連性によって形式が左右されるのは、盛岡市方言に限らない。遠野方言を扱う高田（2003）でも同様の指摘がある。

> これら二つの形式（タッタ形とタ形：筆者注）は、〈現在パーフェクト〉を表しうるかどうかという点において異なる。〈現在パーフェクト〉とは、過去の運動を単に完成的にではなく、現在におけるその効力と共に捉える用法であるが、この用法は「～タ」にはあるが、「～タッタ」にはない。（高田2003）

つまり、盛岡市方言と遠野方言には出来事と現在の関係性という点で同様の捉え方をするのである。そしてこの出来事の事態と現在とのかかわり方という共通の意識によって、タ形とタッタ形は使い分けが行われている。また、高田（2003）では、タッタ形が直接体験・目撃した出来事を表しやすいとし、そのモーダルな特徴は「－ケ」に類似しているとする。さらに、秋田県について述べる日高（2000）には、秋田県中央部と南部にみられるタ形とタッタ形（シテアッタ／シタッタ）は、前者を一般的・抽象的な過去とする一方で、後者を「「過去（発話時以前）に当該の事態・出来事が存在した」ことを、話者が自分自身の判断（体験）をふまえて述べる」、従来「回想的過去」と説明されるものであるとする記述がある。このタッタ形の説明は高田（2003）にあるモーダルな特徴に近いものと考えられる。日高（2000）では、タ形に出来事と現在との関係性という分析はないが、より切り離された過去としてのタッタ形の存在がある。さらに、竹田・吉田（2000）では宮城県仙台方言でも同様の報告があり、このタッタ形とタ形の使い分けは秋田県中央部・南部、岩手県盛岡市方言・遠野方言など南部方言から宮城県にかけての出来事の捉え方の傾向といえるであろう。

さて、青森県全域を対象とした2008調査でも、上述のタ形とタッタ形の使用意識の違いと類似

した出来事の捉え方をするものとして、継続相現在で使用されるテダ形の使用意識があげられる。テダ形が伝達を表わすという結果は、まさに出来事との関係性につながっていくものと考える。

(2) 運動会　ヤッテダ。　　(現在も開かれている)

(2') 運動会　ヤッテアッタ。　(現在も開かれているかはわからない)

(2) は、自分で確認しその出来事が現在なお起こっていることを伝達する場合に使用される。つまり、確認した出来事と現在に関係性があるということである。仮にここでタッタ（津軽方言ではテアッタ）形にすると、(2') のように過去運動会をやっていたが、現在やっているかどうかまで含意しないことになってしまう。これに関して佐藤（2007）では、弘前市方言のテラ形とテアッタ形を確認性と報告性とする。テラ形は目の前で動作が継続していることを表すもので、テアッタ形はそれが過去の動作であり、継続していたことを断定的に述べるもので、すぐには確認できないことを報告しているものとする。ただし、このテアッタ形の報告性と本稿でいうテダ形の伝達は種類が異なると思われる。テダ形は現在継続していることを伝達するものであり、佐藤（2007）の言及するようにテアッタ形はあくまで過去に起こった出来事を表すものであり、現在行われているかどうかまでは含意していないからである。このように青森県方言でも、出来事と現在との関係性という捉え方は当てはまる。このような捉え方は、東北地方一般にもいえそうである[8]。

テダ形はタッタ形との対比で出来事と現在の関係を表わすが、では、テラ形はどのような関係にあるのか。従来、テラ形はテダ形の音声ヴァリエーションとされるが、本稿では別形式と捉えたほうがよいと考える。それは、2008調査でテダ形との使用場面での差異がみられることからも明らかである。ここでは、2008調査で確認できた眼前描写のテラ形と他形式の関係をみていく。

テラ形は眼前描写を表わす。また、工藤・八亀（2008）にあるように、形容詞につくと一時性を強調する表現となる。これはつまり、テラ形は出来事がその状態にあることを表わす表現だということである。上でみたようなテダ形とタッタ（テアッタ）形のような現在との関係性でいくと、テラ形は、現在との関係を含意せず、出来事が目の前に存在していることのみを表わす表現ということになる。このことから、テラ形がテンス現在に限らず、テンス過去でも使用されることにもつながっていくと思われる（工藤（1999）ではテンス未来も表わすことが可能）。よって、2008調査で話者が内省しているようにテラ形が眼前描写でテダ形が伝達となるのは、言い換えれば、テラ形は出来事が存在することのみを表し（現在との関係性には触れない）、テダ形は出来事が現在と関係を持ちつつ続いていることを表わすということである。また、タッタ形は出来事が現在においてすでに終了していることを明示する。

以上みてきたように、東北諸方言におけるアスペクト表現は出来事と現在との関係という面から位置づけられ、形式が選択される。青森県方言では、すでに起こっている出来事が現在まで続いていないことを示すタッタ形、現在も続いていることを含意するテダ形、そして、出来事の存在のみを示し、現在との関係を明示しないテラ形が使用される。2008調査では、テラ形の表す範

囲には津軽方言と南部方言で違いがあることが窺えたが、基本的にアスペクトの捉え方、特に出来事と現在との関係性という面では両方言に差異はないように思われる。

6．おわりに

2008調査の結果から、青森県方言のアスペクトは概ね先行研究で示される体系と重なることが窺えた。しかし、先行研究が示すものでは1つの枠に複数形式が並び、形式の意味分けとしては不十分である。2008調査から、継続相では「眼前描写」と「伝達」という要素で表現の使い分けを行っていることがみえてきた。前者の要素を担うものがテラ形であり、後者がテダ形である。これは東北諸方言における出来事と現在との関係性を持つかどうかという捉え方によるものである。また、タッタ形などその他の形式も同じように解釈ができるのである。体系に形式を当てはめるのではなく、形式の意味を探っていく必要がある。今回は竹田（2000）、高田（2003）の示す出来事と現在の関係性がアスペクトの捉え方として東北諸方言に反映できることを示した。

最後に、青森県方言のアスペクトについて残された課題を挙げておく。

まず、2008調査ではパーフェクトや反復習慣など、アスペクトの派生的意味とされるものでは形式の具体的な使い分けを見出すことができなかった。しかし、それには、先述の出来事と現在との関係性を持つかどうかが重要になると思われる。この点を考慮した質問文により各形式が導かれるようさらに調査文を精査し、調査を行う必要がある。また、本稿では言及はしなかったが、複数項目にわたってみられる下北半島のテア形にも注目しなければならない。単なる音声ヴァリエーションか、意味分けを行うものか、出来事と現在の関係性という観点から考慮する必要がある。

次に、青森県下で広く使用が確認できるテラ形の成立に関する問題である。現在では、子音［d］→［r］の交替によって成立したというのが主流であるが、音声的なヴァリエーションが意味の弁別を担うようになったという点で疑問が残るものである。この成立に関しては、再考が望まれる。さらに、津軽方言の中若年層の一部でチャー・チューといった表現が使用されるという報告があり（佐藤1986、高田2001）興味深いものである。ただし、これらはそれぞれテル形、テラ形の音声ヴァリエーションであるとされる。本稿では「食べている＜習慣＞」でクッチャーを1名回答したが話者からもテラ形と同じという内省を受けて地図には反映していない。この音声ヴァリエーションについても、調査対象を広げ、世代間の調査が必要である。

注

1　津軽と南部に大別。ただし此島（1968）によると南部は津軽に比べるとまとまっておらず複雑であり、いくつかの区画が可能とされる。ここでは、津軽・南部の2区分で示す。此島（1968）の区画を参照。

2　旧南部藩領（下北半島から岩手県中部にかけて）であるため。旧藩境は現在の県境とは異なる。

3　一部テンス過去において形式が若干異なるが、それも［タッタ］と［テアッタ］のように音声的なヴァリエーション

であり、大きな用法の差異はみられない。

4　話者情報では以下のように話者属性を表している。

Ex. 三沢【M73】{30(13)／岩手県九戸郡野田村} ＝三沢市の話者。男性（M）、73歳、外住歴計30年、うち13年は言語形成期、出生は岩手県九戸郡田村。

5　ID3の話者は岩手県九戸郡の生まれであるが、九戸郡は旧南部藩に含まれており、三沢市と同じく南部方言に位置付けられる。GAJでも九戸郡は青森県の形式とほぼ差異はないように思われる。また、ID14の話者は旧浪岡町（現青森市）の生まれであり、現在の青森市西部に当たる地域出身であるため、青森市の話者として挙げておく。

6　「ブッタラク」は「ぶっ叩く（強く叩く）」であり、「ブッタダク」と意味は変わらない。また、西日本諸方言のアスペクトでみられるチットルーチッチョル、高知方言アスペクトのチリヨルーチリユーなどは併用される場合でも、音声的な違いのみで意味の区別は持たない。津軽方言においても、中若年層の一部でチャー・チューといった表現がみられる（佐藤1986、高田2001）。ただし、これらはそれぞれテル形、テラ形の音声ヴァリエーションであり、意味の弁別は行わない。

7　東北方言では「（田中さん宅を訪ね）田中さんイダが（田中さんいるか）」「イダよ（いるよ）」というように、日常的にタ形が共通語のル形に対応する場面でも使用されている。

8　津田（2010）が示すように南九州地方では、動作の進行過程を表す形式が多く存在する。しかし、西日本諸方言には出来事と現在の関係性を言い分ける表現はない。これは、出来事と現在の関係を表わす表現を細かく使用し分ける東北諸方言に対比され、東北諸方言と西日本諸方言におけるアスペクトの捉え方の違いが窺える。

【参考文献】

工藤真由美（1999）「青森県五所川原方言の動詞のアスペクトとテンス」『国語学研究』38　東北大学文学部『国語学研究』刊行会

工藤真由美・八亀裕美（2008）『複数の日本語　方言からはじめる言語学』講談社選書メチエ

国立国語研究所編（1999）『方言文法全国地図　第4集』大蔵省印刷局

此島正年（1968）『新訂　青森県の方言』津軽書房

佐藤和之（1986）「若年層話者に見る津軽方言の記述的研究（上）——録音も時価資料からの抽出——」『弘前大学国語国文学』8号（『日本列島方言叢書2東北方言考①（東北一般・青森県）』ゆまに書房に再録）

佐藤和之（2007）「方言主流社会の継続相と結果相——散テルと散テラと散テマッタ——」『日本語学9月臨時増刊号　方言文法全国地図をめぐって』26(11)

渋谷勝己（1994）「V章　鶴岡方言のテンスとアスペクト」『鶴岡方言の記述的研究——第3次鶴岡調査　報告1——』国立国語研究所

高田祥司（2001）「青森県弘前方言のアスペクト・テンス体系<動詞述語編>」『待兼山論叢』35　大阪大学大学院文学研究科

高田祥司（2003）「岩手県遠野方言のアスペクト・テンス・ムード体系——東北諸方言における動詞述語の体系変化に注目して——」『日本語文法』3(2)

竹田晃子（2000）「岩手県盛岡市方言におけるタッタ形の意味用法」『国語学研究』39　東北大学文学部「国語学研究」刊行会

竹田晃子・吉田雅昭（2000）「4．テンス・アスペクト」小林隆編『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室

津田智史（2010）「南九州地方のカタとゴッ」『言語科学論集14』
日高水穂（2000）「秋田方言の文法」秋田県教育委員会編『秋田のことば』無明舎

※本研究は、文部科学省科学研究費補助金（奨励費）による研究成果の一部である。